

## 小川家の将来を託された未明



写真は、明治 28 年（1895）2 月、上越市寺町の鹿野写真館（現在も同地で営業中）で撮られた母チヨと未明（本名健作）の写真です。未明は右手に分厚い本を持っています。

当時、未明は 13 歳、母チヨは 32 歳でした。

この年 4 月、未明は高田中学校（現在の高田高等学校）へ入学します。高等小学校時代、教師に理解されず、孤独で苦しい時期を過ごした未明にとって、中学への進学は、心機一転、新たな希望の世界へ旅立つ意味をもっていました。母にとっても思いは同じだったでしょう。加えて、一人息子が成長し、中学へ進学する、その嬉しい思いを胸に潜めての記念写真でした。

写真には、父澄晴の姿はありません。未明が生まれた明治 15 年（1882）、赤子の未明を膝の上で抱く、澄晴の満足そうな写真が文学館にはありますが、父澄晴は明治の人らしく、家庭の人であるよりは、立志の人として自らの事業にまい進、家を留守にすることが多かったようです。

神道の修行者でもあった父の事業は、上杉謙信の居城であった春日山に、謙信を祀る春日山神社を創設することでした。父が神社創設願書を提出したのは明治 26 年（1893）6 月、翌年 2 月には認可が下りますが、その前後、父は資金集めに諸方を奔走していました。

「山上の風」（「日本評論」大正 5 年（1916）9 月）という小説には、春日山神社に移り住んだ家族の当

時の思いが描かれています。母は「もう、今年中は町から誰も訪ねてくれる者はない」と淋しそうに息子に言います。「こんな山へなど来なけりゃよかったんだね」と息子がそれに答えます。父が山に御堂を建て、そこへ一家が移ってからは、冬季は積雪のため山から下りることも山へ上ることもできなくなります。それでも母は父に従い、息子に、はやく父のあとを継いでほしいと願うのです。息子は、自分の自由が束縛されるように思いつつも、自らの道を信じて山に住む、孤独な父の姿を見やります。

母チヨは、厳格で気性の激しい人だったといわれています。高田藩榊原氏の家臣であった小川家の娘チヨは、長刀をたしなむ、武士の娘でした。父澄晴は、同じ榊原氏の家臣であった大川義応の三男で、小川家へ婿養子に入った人です。武士の世が終わり、禄を失った小川家の再興を期待されたのが澄晴であり、未明でした。チヨが、不在がちの夫に従い、さらに未明を厳しく育てあげようとしたのは、時代状況や家の再興を背景にすると理解されます。

未明は、当時、建築中の春日山神社の施工具合を見に、何度も幸町の家から街道を往復しています。

春日山へ転居してからも、冬季を除き、未明は高田中学へ歩いて通いました。いずれも片道 5 キロ以上はある道のりです。春日山での寂しい暮らしのなかで自然と向き合った体験や、そうした往還での見聞が、自然の姿を未明の胸に刻みこませることとなりました。文学館では、小川未明が遺した写真を多数、小川家からお預かりして所蔵しています。